

# 渋沢栄一の対外認識の萌芽について

梁 紫 蘇

On the Germination of Shibusawa Eiichi's View of Japan's Foreign Affairs

LIANG Zisu

## Abstract

Shibusawa Eiichi (1840–1931), arguably the most famous entrepreneur of modern Japan, lived through four epochal periods of Japanese history: the end of the Tokugawa, the Meiji, Taisho, and first years of the Showa eras. Shibusawa played a decisive role in a number of fields in the modernization of Japan, including politics, economics, culture, and social welfare. In the wave of modernization that swept Asia in the early nineteenth century, Shibusawa served as retainer during the *bakumatsu*, as official in the Meiji government, businessman, philanthropist, and non-official diplomat. This paper examines the germination of Shibusawa's view of Japan's foreign affairs.

**Key words** : 渋沢栄一、対外認識、開国、攘夷論

目 次

はじめに

一 対外認識の芽生え

二 日本の開国前後における印象

三 攘夷論者になる

おわりに

## はじめに

「日本近代資本主義の父」と呼ばれる渋沢栄一（1840～1931）は、江戸幕末から明治・大正・昭和初期にわたって、経済をはじめ政治・文化・公共福祉など幅広い分野において重要な役割を果たした人物である。渋沢は経済的視点から近代日本の経済外交・国民外交の開創と実践に挑み続けた。本論は、渋沢栄一の対外認識の芽生え及び日本の開国に対して彼がどのような印象を持っていたかを考察し、近代日本の代表的な人物における対外認識の発端、あるいは当時の時代背景をさらに深く理解することを目的としている。

渋沢栄一は天保十一年二月三日（1840年3月6日）に、武蔵国榛沢郡血洗島村<sup>1)</sup>（現在の埼玉県深谷市）にある豪農の家に生まれた。渋沢は少年時代から家業の藍の製造と販売の仕事を手伝っていた。家業の関係で彼は商売の知識を身につけ、そのうえ藍の収集と販売のために各地へ赴いたことによって、開国前後の日本の様子を知ることができた。渋沢の対外認識はこうして形成され始めていったのである。

### 一 対外認識の芽生え

渋沢が初めて体験した日本の外交問題は、おそらく嘉永六年（1853年）の「黒船来航」である。周知の通り、アメリカの海軍准将であるペリー（Matthew Perry, 1794-1858）は艦隊を率いて浦賀沖に現れ、近代化的なパワーで徳川幕府を脅かし、日本の開国を要求した。衰えていた幕末政府は翌年1854年にアメリカと最初の不平等条約である「日米和親条約（神奈川条約）」を結び、また英・露・蘭などの欧米列強とも相次いで和親条約が締結され、次々と日本の港が外国に開放された。

当時の渋沢は数え歳で十四の田舎少年であり、その年から家業を助け、「農耕・養蚕ノホカニ藍葉ノ買入、藍玉ノ製造及び販売ニ従事ス。又是年米使ペリーノ渡来ニ刺戟セラレ、栄一ノ胸中攘夷ノ念ヲ萌ス<sup>2)</sup>」ということであった。「黒船来航」の情報、すなわち現在の新聞号外のような「評判記<sup>3)</sup>」が、江戸より二十里離れている血洗島村にも伝わった時、渋沢は大きな衝撃を受けた。『青淵先生懐旧談』より、この衝撃について次のように記載している。

…丑年の浦賀一発の砲声は、真に容易ならざる響を我国に齎らしたのであつた。その噂が血洗島に伝はつた時は、耳許をグワンと打たれたやうに感じたのであるが、まだ十四歳の

1) 渋沢青淵記念財団竜門社編、『渋沢栄一伝記資料』第一巻、1頁。

2) 渋沢青淵記念財団竜門社編、『渋沢栄一伝記資料』第一巻、92頁

3) 渋沢秀雄、『明治を耕した話：父・渋沢栄一』東京：青蛙房、1977年9月、24頁。

少年であり、農業見習の為に自分と村の先覚者藍香の許へも遠ざかつてゐたので、それほどには感せず毎日々々畑へのみ出てゐた…<sup>4)</sup>

ここからわかるように、少年時代の渋沢は、1853年のペリー来航事件に対してショックを受けた。しかし、その時彼はまだ田舎で「農業見習」として畑の仕事をしていたため、日常生活においてはあまり変化を感じていなかったようである。

渋沢は小さい頃から父に就いて『大学』・『中庸』などの漢籍を読み、それから従兄弟の尾高惇忠<sup>5)</sup>より儒学を学んで、『論語』をはじめ四書・五経を通読した。とりわけ十代頃からは『外史』・『十八史略』・『史記』・『漢書』など難しい歴史書が読めるようになり、読書に没頭した彼は歴史や軍事についても関心を持つようになった。

渋沢の生まれた1840年は、清国とイギリスの間でアヘン戦争が勃発したという、歴史的に大きな国際事件が起こった年であった。東アジアが近代に突入してから初めて起こった東西文明間の衝突とも言えるアヘン戦争は清国の戦敗で幕を閉じ、また清国はイギリスとの間に南京条約を結んで開国させられた。この大事件は日本にも大きな影響を与えた。知識人界を始め、日本のリーダーたちは西欧諸国が日本に迫ってきていることに強い危機意識を抱くようになった。「黒船来航」までの十年間に、日本では清英関係やアヘン戦争に関する著書が流行し、その中で、斎藤馨著の『鴉片始末』（1843年）、坂厚雄著の『阿片乱記』（1854年）、塩谷宕陰著の『阿芙蓉彙聞』（1847年）、早野恵著の『清英近世談』（1850年）等の書物が刊行された<sup>6)</sup>。渋沢は「黒船来航」以後にちょうど『清英近世談』を読み、欧米に対する認識の起点となった。

『清英近世談』前篇五卷（関西大学増田文庫所蔵の五卷合冊版を参照）は、二十枚ほどの画像と地図のイラストを付けた、アヘン戦争の経緯を詳細に再現した本である（図1、2参照）。図1はイギリス商人が林則徐の広州・虎門でアヘンを焼失したことに抗議し、汽船を動かしてロンドンへ報告しに行く場面である。この事件はアヘン戦争の導火線になった事件である。図2はチャールズ・エリオット（Charles Elliot, 1801～1875）は軍艦で天津を急襲し、和議を要求しようとする場面である。アヘン戦争当時、イギリスは主に帆柱が3本立てであるフリゲート艦を主力軍艦とし、黒船のような武装汽船は数隻しか使用していなかった。『近世談』に描かれたイギリス軍と清国軍の戦いは非常に激しく、行間にイギリスに対する怒りがにじみ出ている。渋沢は黒船が勢いで江戸湾に現れる光景を目撃こそしなかったが、『近世談』を読むうちにイギリスを代表とする欧州に対するイメージをじょじょに身につけていったであろうことは考え得る。

4) 渋沢青淵記念財団竜門社編、『渋沢栄一伝記資料』第一巻、96頁。

5) 尾高惇忠（1830-1901）：号は藍香、日本の実業家。渋沢栄一はその妹であるちよと結婚し、従兄弟になった。

6) 梁紫蘇、「試論『海国図志』対近代日本の影響」、松浦章編著『近代東亞海域文化交流史』博揚文化事業用限公司2012年8月、248頁。

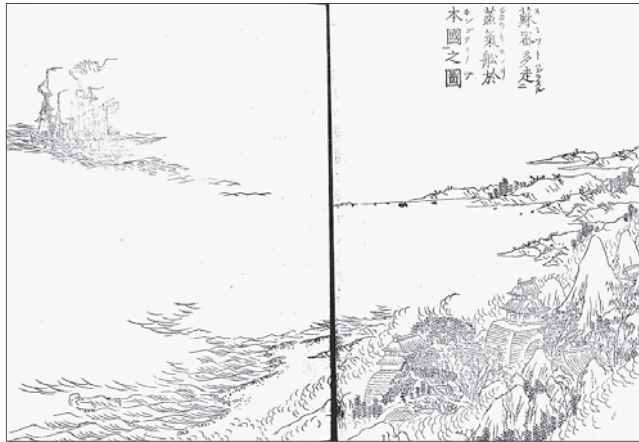


図1 蘇密多走蒸氣船於本國之圖<sup>7)</sup>

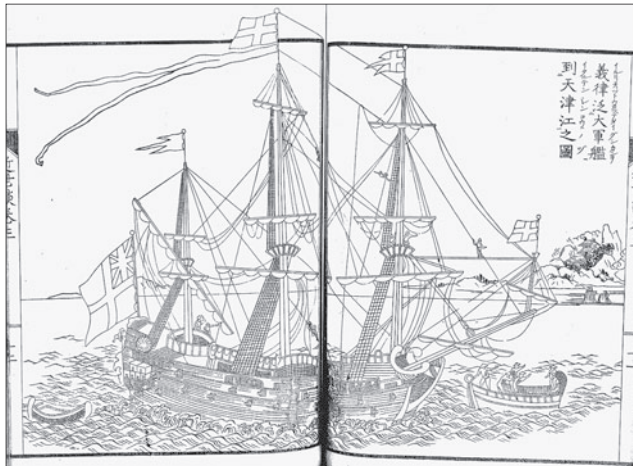


図2 義律泛大軍艦到天津江之圖<sup>8)</sup>

『近世談』の序言・「清英近世譚叙」には次のように書かれている。

孫子曰知己知彼百戰百勝、知己不知彼、每戰皆敗、信哉是言也。故明王出師也、必先察我國之刑政與敵國之刑政、或料我將之材武與敵將之才武。我之所長何事也、彼之所長何事也。我之火術如何、敵之火術如何。虛實詳聞強弱相謀校量、既定而後接戰、是以四出攻略橫行天下、前無堅陣後無強敵。其建大功也可數日而待焉。鴉片之亂清國之將士皆非無勇也。

7) 早野恵編『清英近世談』巻二、嘉永三年庚戌春三月（1850年）刊行、5-6頁。

8) 早野恵編『清英近世談』巻三、嘉永三年庚戌春三月（1850年）刊行、11-12頁。

其所患者知己不知彼。英夷之酋長皆非有勇也。其所貴者知彼知己。何以言之英夷知清人之長於陸戰不與爭其鋒、挫之以火術、苦之以水戰。清人及之。然則清國之所以敗、英夷之所以勝、皆出於此乎。孫子兵家之標準也。從其言則勝、違其言則敗。清人雖讀其書而忽其言、是以遂損國體、取笑於萬國不亦悲乎。嗚呼！治國家者果無踏其軌則可也<sup>9)</sup>。

つまり、ここは『孫子の兵法』の名句である「彼を知り己れを知れば、百戦して殆うからず。彼を知らずして己れを知れば、一勝一負す。彼を知らず己れを知らざれば、戦うごとに必ず殆うし」を取りあげ、清国の敗戦の理由を「英夷」について何も知らなかったことに帰している。当時日本の知識人がアヘン戦争に関する記録・評論本を刊行したのは、日本が清国のようになってはいけないという警鐘を鳴らすためであった。しかし渋沢は『近世談』を読んだ時、既にペリーが黒船を率いて浦賀港に来たという情報を聞いた後のことであったため、彼の第一の関心はもしアメリカと日本とが「戦争にでもなつたらどうしよう<sup>10)</sup>」ということであった。

渋沢は昭和六年（1931年）、亡くなる直前にハワイの実業家ウォルタ・デリンガム氏<sup>11)</sup>一家と対談した際に、その息子が十四歳になると聞いて、自分が十四歳の時に感じたことを次のように述べた。

…此英吉利の支那に対する仕方はどうも人道に背く仕方である、自分の利益の為に、理窟で勝つた人を力づくでいぢめたといふので、誠にわるい事をするものだ、外国といふはおしなべて悪い事をするものだ、かう云ふ風に一般に考へるに至りました。私は少年ながら亜米利加がどういふ仕向をするものかと恐がらない所ではない、色々と大人も申しますし、色々に心配したのであります。少年ながら我国を思ふ為であります。（中略）もしも日米戦争にでもなつたら、英吉利に支那が被つたやうな事があるならば、日本は殆んど人類でないやうな待遇を被らねばならぬと心配したのであります。（下略）<sup>12)</sup>

渋沢の談話を解説してみれば、この一節は彼の欧米に対する初期の認識をよく示している。すなわち欧州の代表国であるイギリスが清国への非人道的な外交接触を知るころによって、アメリカもいずれ日本と戦争をするようになるかもしれないと恐れたのである。まだ「外国」との直接の接触がなかった彼にとって、欧米に対する最初の認識はあまりよいものではなかった。その上、日米が戦争になるかもしれないと未来の事を心配するようになった。

9) 早野恵編『清英近世談』、嘉永三年庚戌春三月（1850年）刊行、1-2頁。

10) 渋沢青淵記念財団竜門社編、『渋沢栄一伝記資料』第一巻、165頁

11) ウォルタ・デリンガム（Walter Francis Dillingham, 1875-1963）：ハワイ・ホノルル出身の実業家、ハワイの産業の男爵と称されている。彼はハワイの政治家たちに支持によって、ホノルル都市を發展させた。

12) 渋沢青淵記念財団竜門社編、『渋沢栄一伝記資料』第一巻、166頁。

## 二 日本の開国前後における印象

日本の開国前夜である黒船渡来事件の二ヶ月前に、渋沢は一度父親につれられて江戸見物に行ったことがあった。彼は花満開の春の江戸の町に魅了され、この太平は長く続くものだと思っていた<sup>13)</sup>。しかしその頃の徳川幕府は参勤交代の制度など外見からは直ちに崩壊しなさそうに見えたが、実際の政権内部はすでに腐敗していた。後日、日本が欧米列強に強制されたように開国していくことに際し、渋沢は書生連の時論や人々の話を聞き、幕府の政事が衰頹していたことを強く感じるようになった<sup>14)</sup>。

もう一つ少年時代の渋沢に衝撃を与えたのは「御用金」事件である。安政三年（1856年）、渋沢は17歳（数え年）、父の名代として「御用金」五百両を岡部の村の代官・若森に献上し、ただ用金の趣を聞こうと一言申しただけで、その代官に貴様は「十七にもなって居るなら、モウ女郎でも買うであろう<sup>15)</sup>」とからかわれ、献上した五百両も大した金額ではないとごまかされ、叱責された。確かに渋沢家は栄一の父・市郎右衛門の努力で、「村の中では相応の財産家といわれるほどになって<sup>16)</sup>」、家道繁昌になって来たが、安政三年の渋沢家の藍玉の引き取りを記録する通帳・「紺屋兼吉宛藍玉通」を参照して見ると、藍玉4個は「正ミ代金七両也<sup>17)</sup>」であった。すなわち代官に調達した「御用金」の五百両は、藍玉を285個以上に相当する金額である。その年の春、江戸の白米の値段は1石（約180リットル）につき101両である<sup>18)</sup>。つまり当時の500両は大家族の1年分の白米が買える相当の大金である。

小野武雄著『江戸物価事典』によると、「御用金」とは江戸時代中葉から徳川幕府が国費の不足を補うため、御用達商人に対して半強制的に徴収する金銭である。集めた資金は本来、城の修繕や海防の費用につかわれるべきものだが、渋沢が遭遇した代官はそれを姫様の嫁入りや若殿様の乗り出しなどに濫費する悪役人であった。

この事件をきっかけに渋沢は幕府の政事に不信感を抱くようになり、また幕府のヒエラルキー社会と政治社会制度への不満や懐疑が生まれ、反抗思想が成長し始めた。後日彼は当時の日本社会の状況を回想して次のように述べている。

…その時分の徳川政治というものは、いわゆる世官世職といって、家柄が定って居るから、

13) 渋沢青淵記念財団竜門社編、『渋沢栄一伝記資料』第一巻、167頁。『竜門雑誌』第三〇一号第一六頁、大正二年六月。

14) 渋沢栄一口述／長幸男校註『雨夜譚：渋沢栄一自伝』岩波書店、1984年11月、30頁。

15) 渋沢栄一口述／長幸男校註『雨夜譚：渋沢栄一自伝』岩波書店、1984年11月、26頁。

16) 渋沢栄一口述／長幸男校註『雨夜譚：渋沢栄一自伝』岩波書店、1984年11月、25頁。

17) 渋沢青淵記念財団竜門社編、『渋沢栄一伝記資料』第一巻、113頁。

18) 小野武雄著『江戸物価事典』展望社1979年、279頁。

いくら器量があろうが才識があろうが新規にその地位に出る事は出来ぬ。その他の役々も皆それぞれにこの階級順序があって、農民などがドノように才智があつて勉強したからと  
 いて、とうてい天下はおろか、一国一郡の政事にも与かり得られるような制度ではなかつた<sup>19)</sup>。

この文章からは、渋沢が幕末期の社会システムに対して不満を抱いていたことが分かる。つまり農民出身の彼は、身分の関係でどれほど努力しようとも、政治にかかわることは難しかったのである。これも渋沢が後日「尊王攘夷論」の思想を受け入れるための伏線であった。

安政三年の「御用金事件」から文久元年（1861年）までの五年間、渋沢は家業一途に出精し、多忙な日々を送って、商業への才能も小さなハスが尖つたつぼみの一端をのぞかせるように開花し始めた。藍の商売のため、彼は信州・上州・秩父の三カ所を巡回することが多かったが、開国以降の様子を観察する好機を逃したくなかつたため、「時ニ従兄尾高新五郎・同長七郎等ト同行シ、多ク詩文ヲ作ル。又江戸ニ遊ビテ詩文アリ。而シテ家ニ在ル時ハ乃チ書ヲ読ミ、劍ヲ学ビ、志士トノ交遊漸ク広シ<sup>20)</sup>」という生活をしていたようである。つまり渋沢は開国前後の江戸へ出入りすることによって見聞を広め、志士との交友関係を築いた。そして彼は遊歴の見聞をもとに次のような「感時憂世詩」を作り、世道に対する感懐を表現した。

#### 田家感慨

世末人趨利。姦富恣横行。不奪則不饜。豈遑顧忠誠。  
 果然姦爾輩。喝声驚昏盲。尸位汝何者。漫成城下盟。  
 天権漸売却。銖銖争轻重。偷安又姑息。将掩天日明。  
 天日縦可掩。豈奪忠義暗。感窮情自切。事大志愈精。  
 可謂心事非。狂瞽任人評。嗚呼彼冥者。夷貢偏經營。  
 不織又不耕。只有繰車鳴<sup>21)</sup>。

つまり世の中が混乱する際に、人々は各自の利益に傾くのみで、奸悪な人や富める人が随意に横行する。奪うことに厭きられず、ことによると忠誠に顧みられるだろうか。果たして君たちが愚か者とも、その一喝で愚昧の盲目的な者の目を覚まさせよう。なぜその地位を占める、「城下の盟」の果てになる。天皇の権力はますます売り出され、人々は金銭を争う。一時の安楽をむさぼり安逸に過ごし、太陽の光を覆い隠す。太陽の光が覆い隠されるが、ことによると忠義が奪えるだろうか。感情が尽くされるほど誠実で、事が大きければ大きいほど志が高く保た

19) 渋沢栄一口述／長幸男校註『雨夜譚：渋沢栄一自伝』岩波書店、1984年11月、48頁。

20) 渋沢青淵記念財団竜門社編、『渋沢栄一伝記資料』第一巻、192頁。

21) 渋沢青淵記念財団竜門社編、『渋沢栄一伝記資料』第一巻、201～202頁。（青淵存詩）

れる。世の紛乱に関心を持つというべき、己の愚は人の判断にまかせるのみ。ああ、愚かなる人よ、洋夷は貿易の経営に偏る。「機も織らなければ耕作もしないで、唯糸の繰車を鳴らして居るだけである<sup>22)</sup>」。詩文の解釈から見ると、20代前半の渋沢はすでに国家の興廃にかかわる国事に高い関心を示していたことが分かる。攘夷論に没頭した彼は、その頃に「貿易は国を富ますといふことを」を知らず、「唯生糸を製して売るといふことは殆ど夷狄に貢を納めるやうな感じを持つて、此の如き詩を作つた<sup>23)</sup>」のである。

渋沢の頭の中では田舎の百姓として生きていくことに満足できず、家業を経営する中で、憂国の志士である従兄長七郎やその友人の書生らと交遊する機会を得ることができ、こうして「広く当世の志士に交遊して議論も聞きたく、または実際に当世の模様も見たい<sup>24)</sup>」という志と覚悟を持つことができた。彼は当時体験した思想風潮について次のように回顧している。

…私共幕府が外国に対する政略は唯だ己れが怯懦なるために服従するのである、所謂城下の盟であると共頃流行した水戸風の学問から支那宋末の歴史な読みて秦檜は金と和した或は王倫孫近と云ふ者は皆な姦臣で是等は皆な国を誤る者であると云ふて胡澹庵の斬奸の表だとか或は李綱の上書だとかさう云ふやうな書物を見て所謂慷慨悲歌の士で世の中を押廻はしたのであります、其頃には攘夷は必ず出来るものだと考へた…<sup>25)</sup>

当時の幕府は外国に対して服従の態勢をとつたため、憂国の志士たちの間で水戸学が不平等条約締結のころに盛んになっていった。ちょうどこのころ渋沢は水戸学の影響を受け、また中国の宋朝末期の秦檜が金との「乞和書」を起草したことや、王倫と孫近等の奸臣が宋朝を滅びの道に導いたことなどを描いた書物を見て、この中国の歴史物語と幕府の条約締結行為を重ねた有志たちの声に耳を傾け、攘夷の必然性を固く信じるようになった。

こうして、読書や交友を通じて幕府の外交問題について認識を得ることができた渋沢は、日本の情勢を把握するにつれて「尊王攘夷」の旨を固めていったのである。

さらに渋沢は学習の環境からも対外の認識を深めた。渋沢の生家に保存された筆写本の中に、攘夷論に関するものが二冊ある。それは大橋訥庵著『關邪小言<sup>26)</sup>』と尾高藍香著『交易論<sup>27)</sup>』である。土屋喬雄氏は昭和十一年（1936年）十一月の『竜門雑誌』に発表された「青淵先生筆写

22) 渋沢青淵記念財団竜門社編、『渋沢栄一伝記資料』第四十五巻、110頁。『竜門雑誌』第275号（1911.04）23-31頁。1911（明治44）年2月11日（土） 渋沢栄一は埼玉県学友会大会での演説でこの詩を朗読した。

23) 渋沢青淵記念財団竜門社編、『渋沢栄一伝記資料』第四十五巻、110頁。

24) 渋沢栄一口述／長幸男校註『雨夜譚：渋沢栄一自伝』岩波書店、1984年11月、31頁。

25) 渋沢青淵記念財団竜門社編、『渋沢栄一伝記資料』第一巻、164-165頁。（竜門雑誌 第二〇四号・第八一九頁明治三八年五月）

26) 渋沢青淵記念財団竜門社編、『渋沢栄一伝記資料』第一巻、211頁。

27) 渋沢青淵記念財団竜門社編、『渋沢栄一伝記資料』第一巻、212頁。



攘夷論文献に就いて」の文章で、その二つの資料に関して詳しく述べている。本論では概要だけを述べる。『闢邪小言』は幕末の主流的な攘夷論で、朱子学の視点から「邪説」洋学に対して駁論したものである。『交易論』は経済生活の方面からの攘夷論であり、それを書いた渋沢の従兄弟である尾高藍香は、当時の水戸学の藤田東湖と会沢正志の論旨に傾倒し、感化されていた。「国は鎖さなければならず、夷狄は攘わなければならない。彼等のいう和親通商を許すのは、城下の盟を結ぶことだ。そんな汚辱がまたとあろうか。我が国に戦う力があってこそ、真の和親は結べる。それなくして結ぶ和親は屈従にほかならない。（中略）開国を許した幕府は国賊<sup>28)</sup>」と幕府の開港行為を強く非難した。これらは一つの側面にすぎないが、渋沢の育った環境から彼の対外観の芽生えに密接に関係していたことを証明している。

### 三 攘夷論者になる

ペリー来航以降、日本は開国することになったが、内政の混乱と外圧という二つの刺激のもと、伝統である「尊王」と鎖国政策の原点である「攘夷」が合流し、水戸学や吉田松陰などの思想家たちによって「尊王攘夷論」が生み出され、且つ盛んになった。安政六年（1859年）、開国以後の日本は外国勢力の侵入に伴って物価が高騰し、国内の不満が上昇した。尊王攘夷論の影響による抵抗運動は大衆化への方向に向かいつつあった。このような社会的背景の中で、渋沢は水戸学の思想に強く共鳴し、「二十才前後に及びては純然たる尊王攘夷論者<sup>29)</sup>」となった。

文久元年（1861年）に、渋沢は父の許可を得て江戸に2ヶ月余りの間に学問と剣術を兼修し、いわゆる水戸学の主旨である「文武両道」の通りに進んでいた。彼は海保の塾と幕末の名剣客である千葉道三郎（1835～1872）の門に入り、その「真の目的は決して文武両道の修業ではなく、天下の形勢を知り、天下の志士と交はる為めだった<sup>30)</sup>」のである。その結果として、渋沢は完全な尊王攘夷者になり、「遂に一大変動を生ぜん」とする考えを生み出した。『渋沢栄一伝稿本』第三章「遊学」にこのことについて次のように書かれている。

…（栄一は）安政の初年以来、北は両毛の山河な踏破し、南は江府の名家な歴訪して、文武の業を励みつつ徐に天下の形勢を探れり、而して其江戸に遊ぶや、海保漁村上総の人章之助に文学を、伊庭軍兵衛幕臣秀業に武技を学びたりき、かくて其見聞する所を郷里に報告し、又屢其朋友を伴ひ来りて慷慨談論し（中略）自ら商業以外の友人を生じ又志士・文人等の来遊に接して聞見を広むるを得たれば、二十才前後に及びては純然たる尊王撰夷論者となり…先生は尾高長七郎が海保塾にあるをたよりにて江戸に赴き、同じく漁村の門に学が、

28) 渋沢秀雄、『明治を耕した話：父・渋沢栄一』東京：青蛙房、1977年9月、25頁。

29) 渋沢青淵記念財団竜門社編、『渋沢栄一伝記資料』第一巻、223頁。

30) 渋沢秀雄著、『攘夷論者の渡欧：父渋沢栄一』双雅房1941年、113頁。

滞在二箇月余にして郷に帰る、其間先生は講学の士と交を結びて、經史を論じ詩文を応酬するなど、専ら文学の修養に身を委ねしが、天下の形勢につきても注意を怠らざりき<sup>31)</sup>。

ここから分かるように、渋沢は江戸での遊学で求めたのは学問や剣術の上達だけではなく、天下の有志と読書・撃剣に長けた人々と交友することであった。

もともと青年達は時代の思想潮流に敏感で、「国難を坐視する」ことができなかったのである。文久三年（1863年）、二年間で幾度も故郷と江戸を往復し、遊学を経た渋沢は、ついに高崎城を乗っ取り、横浜異人館を襲撃する攘夷計画を立てた。彼らが結社した維新組「天朝組<sup>32)</sup>」は日本全国に三百組以上存在した幕末維新新選組の一つである。首謀者は渋沢で、従兄弟の喜作、尾高藍香（悼忠）、尾高長七郎などが主要なメンバーであった。挙兵の檄文を執筆したのは尾高藍香である。

### 神 託<sup>33)</sup>

一近日高天ヶ原より神兵天降り

皇天子十年來憂慮し給ふ横浜箱館長崎三ヶ所ニ住居致ス外夷の畜生共を不殘踏殺し、天下追々彼の欺に落入、石瓦同様の泥銀にて日用衣食の物を買とられ、自然困窮の至りて畜生の手下に可相成苦難を御救被成候間神国の大恩相辨ひ異人ハ全狐狸同様と心得征伐の御供可致もの也。

一此度の催促に聊ニ而も故障致候者ハ即チ異賊の味方致候筋に候間無用捨斬捨可申候事

一此度供致候者ハ天地再興の大事を助成仕候義に候得は永く神兵組と称し面共

々其村里に附て恩賞被仰付

天朝御直の臣下と相成萬世の後迄も姓名輝き候間抜群の働可心懸事

一是迄異人と交易和親致候者ハ異人同様神罰可蒙儀ニ候得共早速改心致軍前に拝伏し身命を抛御下如相待候ハ、以寛大の神慈赦免可有之候事

天地再興文久三年癸亥冬十一月吉辰（下略）

この檄文から分かるように、渋沢一団は尾高藍香を中心として、異人を討伐する覚悟を十分整えた。また外国人との接触は一切禁止され、「交易和親」の行為をする者は外国人と同じ罪であることも明示されている。渋沢は江戸に出て、海保塾に入ったばかりの頃、浅草の中店で初めて二人の外国人の男性を見かけ、思わず彼らに刀を向けることになった。この遭遇に対し、

31) 渋沢青淵記念財団竜門社編、『渋沢栄一伝記資料』第一巻、222頁。

32) 「幕末維新新選組・幕末諸隊総覧」<http://www.bakusin.com/syotair3.html>

33) 渋沢青淵記念財団竜門社編、『渋沢栄一伝記資料』第一巻、244頁。

彼は「…偶々浅草に遊んで異人を見る腰聞の宝刀躍り出でんとほつす。思ひ起す子房の暴秦に椎するを<sup>34)</sup>」などの詩句を書いて、外国人に対する不安と反感を表した。

渋沢は今回の一揆に対し、すでに身を国に捧げて死ぬ決意までしていた。彼は海保・千葉兩塾の有志の同志を69人集め、武器を準備して、1863年11月23日に一揆を起こすことを決定した。この行動の目的は「攘夷遂行と封建打破<sup>35)</sup>」であった。その計画は「上州高崎城を夜襲して之を攻陥し」てから「横浜の洋館を焼撃ちする<sup>36)</sup>」という誰の目から見ても明らかな暴挙であった。

しかし渋沢は挙兵の準備を整えていたにもかかわらず、京都で「八月十八日の政変」（文久の政変・堺町門の変とも呼ばれる）が起こったために、倒幕派の中心は混乱することになる。その政変を目の当たりにした尾高長七郎は当時の状況を見抜き、「今は挙兵の時機にあらざる<sup>37)</sup>」と外国人を見たら斬り殺すというような攘夷作戦は如何にも無謀であると渋沢を説得した。こうして計画は中止となり、栄一と喜作は共に京都へ出奔した。

## おわりに

渋沢栄一を日本の近代化を支えた典型的な人物として取り上げたのは、彼の出身あるいは体験したことが幕末において多くの有志者と共通している部分があるからである。攘夷論を受け入れた者たちは日本が開国の道へ進むに従い、欧米に対する認識を育み深め、その認識をさらに進展させていった結果として、「攘夷」の思想潮流に傾いていった。なぜなら渋沢の場合、少年時代に「黒船来航」という西洋列強からの衝撃を受け、また列強に関する書物を読むことで、イギリスを始めとした欧米各国に対する最初の印象を持ち、さらに日米の間に戦争が起こる可能性について心配した。続いて彼は家業を経営する中で日本の開国を体験し、郷里を出て江戸遊学することを求め、憂国の有志と接することと共に、国家の形勢を徐々に知ることができた。彼は有志たちの間で流行っていた水戸学の「尊王攘夷」思想の影響を受け、完全な攘夷論者になり、倒幕運動を計画し、実行しようとした。

前述の通り、渋沢栄一の対外認識におけるインパクトと天下の情勢を知るという念願は常に一貫していた。そしてその認識はのちに彼が徳川慶喜の幕臣となり、維新後はまたは明治政府大蔵省の官僚となった時にも引き繋がれていったのである。

34) 渋沢青淵記念財団竜門社編、『渋沢栄一伝記資料』第一巻、224頁。（市河晴子筆記）

35) 渋沢青淵記念財団竜門社編、『渋沢栄一伝記資料』第一巻、232頁。

36) 渋沢青淵記念財団竜門社編、『渋沢栄一伝記資料』第一巻、232頁。

37) 渋沢青淵記念財団竜門社編、『渋沢栄一伝記資料』第一巻、262頁。